

# 人麻呂圈の言語

—「月船」の形成—

辰 巳 正 明

## 1 はじめに

文武天皇の「詠月」と題する五言詩（『懷風藻』所収）に、「月舟」の語が詠まれる。

月舟移霧渚<sup>1</sup> 楓檝泛霞浜<sup>2</sup>（古典大系15）

この「月舟」の語は、序文にも「鳳鸞天皇泛月舟於霞浜」と見えているが、その解釈については一定していない。この「月舟」は月を舟に譬えたものであるのか、或は、月に照らされている舟であるのか、決め難いと云える。これは、「月舟」に対応する「霧渚」「霞浜」「楓檝」の語が、天上及び地上のいずれにも解釈のできる要素を含みもった漢語であること、「月舟」が「月」字の熟合から幾通りかの解釈が可能であること、などによりその解釈に困難さがあるのである。

また、この「月舟」の語の出典についても、『万葉集』の「月船」とともに、小島憲之氏は「暮聞にして漢籍の例を知らぬ。」と云い、月を物に見たてる方法として、初唐李嶠の「月宇臨丹地 雲窓網碧紗」（侍宴甘泉殿）を掲げ、その用法が六朝唐代に多く見えることを指摘して、そこに「月舟」の語の生じた理由を見出される。夙に、林古溪氏は、『文選』一本の陶洵明詩「叩棹親月船臨流別友生」（辛丑七月夜行塗口）の「親月船」を指摘している。しかし、この語は善本の胡刻本に「叩棹新秋月」とあることにより、小島憲之氏は「親月船」の語に否定的である。楊勇氏の『陶洵明集校箋』にも一本の「親月船」を掲げるが、曾集本の「新秋月」を取る。いずれにしても、「月舟」は漢語からの出典を求めることは困難であると思われる。従って、中西進氏は先行の論を考慮しつつ、次の漢の武帝の

故事を引用し、

影娥池中有遊月船觸月船鴻毛船遠見船載數百人或以青桂之枝為棹或以木蘭之心為楫  
とある、池遊観月の船を「月舟」と習慣的に呼ぶことが可能であった、とする。漢武の観月遊宴の故事が著名な伝説であったことや、武帝の故事が『懐風藻』に多く見られること、などに理由を見出される。<sup>(7)</sup>

かかる「月舟」の論は、『万葉集』の「月船」の語を内包したものである。だが、これらの論によって『万葉集』の「月船」の語が解釈できた訳ではない。むしろ、中西進氏は『懐風藻』の「月舟」は『万葉集』の「月船」とは別途の語であると考え、「月舟」「月船」の語を包含すべき結論は見出し難い、とされるのである（先掲書）。

## 2 漢語の認定

『万葉集』に詠まれる「月船」の語は、いずれも「月」を「船」に譬えたもののみであると考えられる。

(イ) 天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見（7—10六八）

天の海に雲の波立ち月の船星の林に榜ぎ隠る見ゆ

(ロ) 春日在三笠乃山二月船出遊士之飲酒杯爾陰爾所見管（7—12九五）

春日なる三笠の山に月の船出づ遊士の飲む盃に陰に見へつ

(ハ) 天海月船浮桂梶懸而滂所見月人壮子（10—13三三）

天の海に月の船浮け桂梶懸けて榜ぐ見ゆ月人をとこ

(イ)は「詠天」と題のある人麻呂歌集の所出歌であり、(ロ)は人麻呂歌集の旋頭歌に続く出所作者不明の旋頭歌、(ハ)は人麻呂歌集などの未詳歌群より成る巻の「詠月」の題詞をもつ詠物歌である。(イ)の歌については「全く漢文的叙法」（鴻巣『全釈』）であると云い、「天を海に、雲を波に、月を船に、星を林に見たてたのは、何か支那に粉本がありそうであるが、本拠といふ程のものはまだ提示されていない。」（土屋『私注』）とも云い、漢詩文の影響のあるだろうことを指摘しつつ、先掲の文武御製の「詠月」詩を引用するのである。たしかに、これら「天海」「雲波」「月船」「星林」の語は、漢語的な熟合と考えられるものである。先の「詠月」詩にも「月舟」の他に「星間」「雲漢」の語が見える。

「星間」の明確な出典は見られないが、「雲漢」は「毛詩」(大雅)に「倬彼雲漢」とあり『詩箋』に「雲漢謂天河」とある。そこで、(1)の「詠天」に見える語が漢語的な表現であるか否かを確認する必要があるであろう。それらの語を便宜的に『佩文韻府』によると、

天海 子晋笙歌馭鳳于天海、王喬雲笏控鶴于玄都。(孔稚珪「褚先生伯玉碑文」)

雲波 象蛇虹之輔体中含曜乎雲波。(庾珣「車渠碗賦」)

のように、「天海」と「雲波」の用例のみが見られる。孔稚珪は南齊、庾珣は三国魏の時代である。しかし、「月船」の語は「月舟」と同様に見出されず、特殊な用語であると考えられよう。「星林」は「星榆」の語で「天上何所<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>歴<sub>レ</sub>星<sub>レ</sub>榆」(古楽府)があり、星の中に榆の木があると云う伝説に基づいている。『懷風藻』にも「金漢星榆冷銀河月桂秋」(山田三方「七夕」)と詠まれるが、「星林」は星を林に見たたものであるから、「星榆」とは全く別語である。

(ハ)の「桂梔」は、「詠月」詩の「楓楸」と同じ意味であるから、いずれも「月舟」「月船」の語に対応する。この「月」と「桂」「楓」の対応は、桂や楓が月に生えている樹木であると言う、中国の伝説による。例えば「旧言、月中有<sub>レ</sub>桂、有<sub>レ</sub>蟾蜍、故<sub>レ</sub>異書言、月桂高五百丈、下有<sub>レ</sub>一人常斫之云云」(『酉陽雜俎』)とある。『万葉集』にも、「目には見て手には取らえぬ月の内の楓の如き妹をいかにせむ」(4-633)とある。「月の内の楓」がそれである。これは明らかに漢詩文の知識を背景として詠んだものであろう。ただ「桂梔」も「楓楸」も漢語としては認め難い。

かかる例から「月船」の背後に漢詩文の影響も考えられるのであるが、直ちに漢語の受容を通じた語彙上の確認は困難ようである。殊に、「月船」の語は漢語の如く考えられるのだが、その出典を確認するのが極めて難しいのは、和臭の漢語である可能性があるからであろう。小島憲之氏は『万葉集』に見える和臭の漢語と思われる例を指摘して、それらをセミ漢語と認定している。おそらく「月船」の語もかかる範疇にある万葉語であろう。

### 3 反神話的構造

(イ)の歌に「天海」の語が詠まれているが、この歌の作者が天上を天海として認識した結果「天海」の語が成立し

たとすれば、この発想の基盤はどこにあるのか。

天上を天海に見たてると云う意識は、古代に於いて必ずしも普遍性をもった発想ではない。なぜなら、古代日本人が捉えた天上観は神話を母胎とする天原思想にあるからである。この天上観は『万葉集』以降に「天の原」と云う枕詞を形成している。従って、この「天原」の語は神話からの発想に基づいたものであるところから、天上を天原と発想する万葉人にとって、それを「天海」へと置き換えることは容易にできなかった筈である。謂わば、「天海」は「天原」に対して反神話的な構想によるのだと考えられよう。それだけに、先の「天海」を詠んだ万葉歌は、神話の範疇を逸脱した、極めて異質な世界を構想した世界であると云える。

古代神話が天上を天原と構想することにより、船に関する伝承に於いても、それを「飛ぶ船」として語る。天上が天原だからである。

東有<sub>二</sub>美地<sub>一</sub>。青山四周。其中亦有<sub>下</sub>乘<sub>二</sub>天磐船<sub>一</sub>飛降者<sub>上</sub>。(神武即位前紀 古典大系本以下同じ)

嘗有<sub>二</sub>天神之子<sub>一</sub>。乘<sub>二</sub>天磐船<sub>一</sub>自<sub>下</sub>天降止<sub>上</sub>。(同左)

饒速日命乘<sub>二</sub>天磐船<sub>一</sub>而翔<sub>二</sub>行太虚<sub>一</sub>也。(神武紀卅一年)

このように、「天磐船」を「飛降」「翔行」と表現するのがそれであり、この船は天上と地上を行き交う船である。その他にも「天磐櫂船」(神代紀)「天鳥船」(同)「天鶴船」(同)などの船も見られるが、古代神話の船が鳥船や鶴船であったりするのは、船を飛び翔るものとして語ることと関連するだろうし、古墳に描かれる船の舳の鳥も関連するのであろう。ともかく、天上を飛翔する船の姿は、当然海上を鳥の如く飛ぶ船の具体的な姿に置き換えたに違いない。神話が天上を飛ぶ船を構想するのに対し、(イ)が天海を渡るとするのにも決して神話的な発想によるものではない。天上を天海とし、月を船とし、飛ぶを渡ると捉えるのは、地上の船の姿をそのまま天上に再現すると云う方法である。これは神話的な発想の規制を超えた新しい表現であったと云えるであろう。

(イ)の一首は「詠月」の題詞をもつ歌であったが、天海に月船を浮かべて桂の楫で船を撈ぐのが見える、と云う内容をもち、結句で「月船」を撈いでいるのが「月人をとこ」であるとすると、(イ)(ロ)の歌で「月人をとこ」を詠むのは(イ)の一首のみであるが、「月船」を撈ぐものとして、この「月人をとこ」が構想されていることは、「月船」の語の成立

に関連して、実は極めて重要な要素である。『万葉集』は、他に数首「月人をとこ」を詠んだ例を収録しているが、それらがいずれも七夕歌であるところに注目されるのである。

#### 4 月と七夕

七夕歌を数多く収録する『万葉集』卷十には、「月人をとこ」を詠んだ三首の七夕歌がある。

(一) 夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ (10—10—10)

(二) 秋風の清き夕べに天の漢舟榜ぎ渡る月人をとこ (10—10—10)

(三) 天の原往射跡白檀挽而隠在月人をとこ (10—10—10)

この三首は、ともに「月人をとこ」を詠み七夕の歌とは異質な性格が見られる。従って、(一)について『全註釈』は「七夕の夜の歌だが、牽牛織女の伝説には関係なく、月を待つ心が詠まれている」と述べ、『評釈』(窪田)は「月の出を待ってゐる歌」であるとす。更に『注釈』も「七夕の作ではなく、月を詠んだ作」であるとす。早く『古義』が「まぎれて七夕の歌中に入たるならむ」と、七夕歌への誤入を説いている。また、(二)について『私注』は「二星のことに直接関係して居ないが、やはり七夕の情景として、天漢を過ぎる月を歌ったもの」であると考へる。しかし、『考』は先の『古義』の考へに等しく、むしろ「詠月」の歌に収録すべきであると説いている。

七夕の夜に月が詠まれるのは『懐風藻』の七夕詩に於いて見られる。

雲衣而観夕 月鏡一逢秋 (藤原史「七夕」)

菊風披夕霧 桂月照蘭洲 (吉智首「七夕」)

月斜孫岳嶺 波激子池流 (紀男人「七夕」)

しかし、『万葉集』では七夕歌に「月」のみが詠まれるところから、『私注』は「漢文学の七夕詩にも、月を併せ歌ふのは常のことであるが、短歌では、両者を一首に歌ふのに不便」であることにより、月のみを詠んだと考へるのである。そうだとすれば、月と七夕とはこの場合どのようなようにかわるのか。

(一)(二)の三首は「七夕」と云う題詞をもった歌群に収録されている歌であるから、七夕の夜の情景として見るこ

とも考えられるであろうが、しかし、(イ)の「詠月」と題のある歌と紛らわしい。むしろ、七夕歌三首は(イ)の歌のように「詠月」の中に収録すべきであって、七夕への収録は『古義』や『考』が(イ)の歌について指摘した通り、収録の誤りであったと見るのが妥当であるかも知れない。

だが、この三首は明らかに「七夕」と題詞のある歌群に収録されているのであり、収録の誤りとは単純に考えることができないように思われる。なぜなら、これら三首が明らかに「七夕歌」として詠まれたであろうことを、人麻呂の作と伝える「七夕歌」によって確認することができるからである。

#### 七夕歌一首

(ト)大船に真梶しじぬき海原を榜ぎ出て渡る月人をとこ(15—36—1)

#### 右柿本朝臣人麻呂歌

天平八年の遣新羅使人が「当所誦詠の古歌」として、人麻呂らの古歌を誦詠した一連の古歌の中の一首が右の歌であるが、左注は人麻呂の作と伝えている。現在それを否定する根拠はない。題詞は「七夕歌」と記し、内容は先掲と同様に「月人をとこ」が詠まれており、その「月人をとこ」が船を榜いでいるのは(ト)に類似するのである。

だが、この七夕歌に関しても『全註釈』は「七夕の歌と題してはあるが、歌は月を中心にして」と云い、『注釈』も「七夕の歌とあるが、これは月の歌と見るべき」であろうとする。更に『万葉集』(古典大系)も「七夕の漢詩に月が詠まれる習慣にならった」ものであると云い、七夕伝説と直接かかわりをもたないとする解釈は、いずれにも共通している。かかる注釈の根拠となるのは、おそらく『考』が「今本ここに七夕歌一首と標せれど月の歌にて此船路にて月の出たるを見て古き歌をおもひ出でうたへるなり此巻までの例に違れば極めて後人のおもひ誤りてさかしらして書加へたるなれば捨つ」と考えたことによるのである。

だが、これらの歌を七夕歌の収録から月の歌へと切離しても、月の歌としては歌の解りにくさがある。それは、他の詠月歌と比較すれば明確であり、七夕歌の月の歌はそれのみでは解りにくい。例えば、(二)は何を仰ぎ待つか、(イ)はなぜ月を船に見たて、それをどこへ榜ぐのか、(イ)はどういう歌なのかなど、疑問がある。おそらく、これら「七夕歌」に収録されている月の歌は、その収録の通り七夕の伝説と関連した中で理解される歌であるところに、歌

のみの解りにくさがあるのではないかと考えるのである。

## 5 七夕伝説

七夕の祭りが朝廷の行事として史書に登場するのは、天平六年七月からである。

秋七月丙寅。天皇觀<sub>二</sub>相撲戲<sub>一</sub>。是夕<sub>二</sub>御南苑<sub>一</sub>。命<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>賦<sub>二</sub>七夕之詩<sub>一</sub>。(『続日本紀』)

しかし、このころすでに『懐風藻』では藤原宇合が「七夕詩」を詠み、また『万葉集』では山上憶良が養老八(六カ)年から天平三年ころにかけて、七夕歌を詠んでいる。七夕が朝廷の行事となる以前に、民間に於いては七夕伝説を中心として、七夕歌が詠まれていたことは確かであろう。養老前後に貴族の間で七夕の詩歌が詠まれたのは、中国の七夕詩の享受と、民間に伝えられている七夕伝説とが、貴族の間に風流として波及した結果によると云えよう。

この七夕の祭りは、『荆楚歲時記』には「乞巧奠」と云う、機織の上達を願う信仰行事として見えるが、もとは、漢水の辺りをはじめ、江南の河辺で機を織る織女たちが七夕の物語を伝え、民間の生活の中で歌が歌われていたものらしい。『文選』の「古詩」に見える「迢迢牽牛星」の詩は、織女たちの労働に相応しいリズムをもった歌であると云う。おそらく、中国の機織の技術と共に、七夕伝説も日本へ伝えられたであろうから、むしろ民間に最も早く七夕伝説が定着していただろうと推定される。

卷十所収の七夕歌を見ても、七夕伝説は万葉人の興味を引いた物語であったことが窺われる。天漢を挾んだ男女二星の悲恋物語は、むしろ、万葉人が自身の恋の経験のごとくに、二星の情に替り歌を詠んでその出逢いに心を配るのである。七夕歌に、相聞と全く見分けのつけ難い歌が多く含まれているのは、その事情を物語っていよう。

七夕伝説の中でも、万葉人がもっとも興味をもったのは、やはり牽牛が織女の許へ通う折の、天漢を船で渡るところにあったと云える。卷十の七夕歌は、長歌も含めて九十八首詠まれているが、天漢を船で渡ることを詠んだのは三十一首ある。そこに、七夕伝説に対する興味の中心があったからに他ならない。ただ、中国では日本の婚姻制度との相異から、織女が牽牛の許へと通うのであり、その折、織女が天漢を渡るには鵲が羽を広げて架けた橋を渡るのである。それを『懐風藻』では、

仙車渡<sup>ニ</sup>鵲橋<sup>一</sup> 神駕越<sup>ニ</sup>清流<sup>一</sup> (吉智首「七夕」)

と詠む。中国の伝説である「烏鵲填<sup>レ</sup>河成<sup>レ</sup>橋渡<sup>ニ</sup>織女<sup>一</sup>」(『白孔六帖』鵲)による。また、「鳳駕飛<sup>ニ</sup>雲路<sup>一</sup> 竜車越<sup>ニ</sup>漢流<sup>一</sup>」(藤原総前「七夕」)とも詠まれ、仙車や鳳駕が天漢を越すのを詠むのは、例えば、「仙車駐<sup>ニ</sup>七襄<sup>一</sup> 鳳駕出<sup>ニ</sup>天潢<sup>一</sup>」(梁何遜「七夕詩」)などの中国詩の模倣であることが指摘されている。<sup>(1)</sup>

しかし、万葉人の七夕歌は、中国的な神仙性を受容せず、むしろ万葉人の現実生活がそのまま七夕伝説に結合されているごとく表現されているところに特徴がある。牽牛が天漢を渡るために、地上的な船が用いられるのはその一つである。

天の河川の音清し彦星の秋榜ぐ船の波のさわぎか(10—120四七)

久方の天の河瀬に船浮けて今夜か君が我許り来まさむ(8—151九)

このように、七夕伝説のなかで、もつとも関心を寄せた部分が、牽牛が船に乗って天の河を渡るところにあったとすれば、七夕伝説歌に於いて、船は極めて重要な素材であったことは確かであろう。

## 6 七夕歌と詠月歌

先掲の(イ)は「詠月」の歌に分類され、(ト)は七夕歌の題をもつものであった。この(ト)の歌は、(ハ)の歌と類似・類想の歌であるところから、七夕の歌とは関係ない、月を詠んだ歌であろうと考えるのが今日の通説である。しかし、かかる類似歌が一方を詠月歌、一方を七夕歌として分類するのはおかしい。

(ニ)(ホ)の三首の七夕歌も、直接七夕に関する語は含まれていないが、三首が七夕の題詞のもとに収録されているのは、(ト)の七夕歌と同じ事情にある。 (ホ)は下句を「船榜ぎ渡る月人をとこ」と詠み、(ト)の下句の「榜ぎ出て渡る月人をとこ」と極めて類似した表現を取るのも、その関連性の強いことを暗示させる。(ハ)は難訓難解の歌であるので後述するが、(ニ)の「夕星」は『和名抄』に「兼名苑云太白星一名長庚暮見於西方為長庚此間云<sup>不</sup>豆」とある太白星(金星)のこととするのが一般の説である。『評釈』(窪田)は、月を夕づつと比較して、夕づつでさえも通う天道であるのにもどかしがり、月の出を待っている歌、としている。『代匠記』は「此歌にてはひとこぼしの異名と聞こへたり」とし



たが、『古義』は、「中山巖水云」として契沖説を斥けているのである。ただ、『私注』は「夕星」を「夕べの星」の意に取り、やはり牽牛を指していると考え、作意も、牽牛は織女の許へ天道を通って行くのに、何時まで待っているかと、会うべき人のない月に同情する人間の心もちである、と述べている。

先に触れたとおり、七夕歌には牽牛が船に乗って天漢を渡ることを素材として詠んだものが数多くある。(例も「船榜ぎ渡る」と詠み、(ト)も「榜ぎ出て渡る」と詠む。天漢を船を榜いで渡るのは、他の七夕歌と同様である。だが、この場合に、船を榜いで渡るのは、歌の構造からどうしても「月人をとこ」でなければならぬ。この月人をとこは、「月を擬人化」(古典大系『万葉集』)したものであると考えられているのだが、「月人をとこ」を月の擬人化であるとしたならば、(例)の「船榜ぎ渡る」や、(ト)の「大船に」といった「船」や「大船」は具体的に何の比喻か不明になるだろう。むしろ、この「船」は「月」を擬制化したものであると考えられるのであり、その事情を(例)の「詠月歌」が説明している。(例)は「月船」が詠まれ、更に「月人をとこ」が詠まれている。「月船」はすでに「月」を「船」に見たものであるから、次の「月人をとこ」を更に月の擬人化とするのは、その理解の上では無理が生ずるのではないだろうか。「月人をとこ」は「桂梶かけて榜ぐ」と、その船を榜ぐ男として表現されているのであるから、そこに「月人をとこ」の性格を見るべきだろうと思うのである。

月を擬人化して詠んだ万葉歌は、数首見えていることは確かである。

天にます月読をとこ幣はせむ今夜の長さ五百夜継こそ(6―九八五)

み空ゆく月読をとこ夕去らず目には見れども因る由もなし(7―一三七二)

山の端のささらえをとこ天の原門渡る光見らくしよしも(6―九八三)

右一首或云、月別名曰佐散良衣壮子也。縁此辞作此歌。

黄葉する時に成るらし月人の楓の枝の色付く見れば(10―二二〇二)

これらは、いずれも「月」が擬人化されたものであり、「佐散良衣壮子」の別名によってもそれがはっきりする。だが、こうした月の擬人化されたものと極めて紛らわしい表現ではあるが、「月人をとこ」はこれらとは異質であることを確認しておく必要があるであろう。

七夕の歌の(ホ)の「船」は、月の擬制化されたものであることが理解できるから、「月人をとこ」は、当然その「船」(月船)を榜ぎ渡る者でなければならぬ。従って、この「月人をとこ」を「彦星」に比定する解釈も見られる(折口『口訳』)のだが、これらの「月人をとこ」は「月船」の「渡り守」であると見るのが妥当である。

渡り守船渡せをと呼ぶ声の到らねばかも梶の音せぬ(10―12072)

渡り守船はや渡せ一年に二たび通ふ君にあらなくに(10―12077)

渡り守船出しいでむ今夜のみ相見てのちは逢はじものかも(10―12087)

吾隠せる梶棹なくて渡り守船借さめやも須叟はありまで(10―12088)

いずれも、天漢の「渡り守」を素材として詠んでいるのだが、こうした「渡り守」の素材を基盤として、更に空想的な構想を以って詠んだのが、「月」を「船」とし、その船を「月人をとこ」が榜いで天漢を渡る、と云った表現をとる七夕歌である。(ト)の「大船」は(イ)の歌との類似から、それが「月船」であることは直ちに理解できるであろう。

(ホ)が「天の漢船榜ぎ渡る」と詠むのは、「月人をとこ」の渡り守が天漢を船を榜いで渡る情景であり、(ト)が「海原を榜ぎ出て渡る」と詠んでいるのも、やはり牽牛を乗せて天海を渡るために出発した「月船」であった。

このように、「月人をとこ」が「月船」の「渡り守」であることが確認できるならば、(ト)の人麻呂の作とする七夕歌の歌意は次のようになろう。

月の船に真梶を沢山取り付けて、天の海原を月人をとこの渡り守が榜ぎ渡って行く。

そして、この「月の船」は、明らかに牽牛を乗せて天の漢を渡る船であり、その船の渡り守が「月人をとこ」である。これは、(イ)の「詠月」の歌も全く同様に理解すべきものではないだろうか。歌意は、

天の海に月の船を浮かべて、月の桂で作った梶を手には、月人をとこの渡り守が榜ぎ渡るのが見える。  
となり、「月船」と「月人をとこ」との関係をより一層明瞭に説明している。

かく考えると、(イ)の「詠月」の歌は、むしろ、七夕歌の一首であったのではないかと思われる。編纂当時すでに「月」の歌として認定され、「詠月」の歌に収録されたのであろう。(イ)が「詠月」に分類されたのは、「月船」「月人をとこ」の語を有するからであったと云えよう。この「月人をとこ」を詠んだ歌が、(イ)の一首を除けば「七夕歌」にの

み詠まれており、かつ、それが船を榜ぐをとことして表現されるところからも、(イ)の「月人をとこ」は七夕歌の一首として充分理解できる筈である。その意味では、(イ)の歌が(イ)(ロ)の「月船」の歌と、(ホ)(ト)の七夕歌とをつなぐ極めて重要な歌であることが知られるのである。

## 7 七夕歌三首

(ホ)の歌は、人麻呂の七夕歌(ト)に下句を等しくするところから、(ト)に従った解釈が可能であろう。

秋風の清らかに吹く夕に、天の漢を月人をとこの渡り守が、妻迎えの月の船を榜いで渡っている。

「月の船」を「妻迎えの船」とするのは、他の七夕歌に、

牽牛の妻迎へ船榜ぎ出らし天の河原に霧の立てるは(8—1—15—27)

と詠むのによる。

(ニ)は、先に「夕星」及び「月人をとこ」を牽牛に比定することにより、七夕歌に関連させる説と、月の出を待つ歌であって、七夕歌への誤入であるとする説とを見たが、しかし、この「月人をとこ」をここでも船の渡り守と考えることで、直接に七夕歌に関連する歌であることが理解できると思われる。

この「夕星」は、通説の通り金星であっても、また、夕方になって出始める星の意と解しても良い。その夕方の星が出始める天上を何時までも仰ぎ待っている「月人をとこ」の姿を詠んでいるのが(ニ)の七夕歌である。夕方の星の出始めるころ、月は西の山際に近く、その月の状態を地上から眺めれば、ちょうど月が天上を仰ぎ船出を待っている姿に見えたのであろう。したがって、歌意は、

夕方の星が出て、すでに天道を通っているのに、何時まで天上を仰いで船出を待っているのだろう。渡り守の月人をとこは。

と考えられる。船出を早く望む歌であり、先の「船はや渡せ」(10—1—20—77)や、或は「天の漢船出はやせよ」(10—1—20—41)などに見られる表現に同じである。

(ニ)は今日定訓を見ない。だが、この「月人をとこ」も他の例と同様に理解する必要がある。まず、二句目の「往射

跡」は古くから多くの訓がなされていて、定ったものはない。

ユキテヤイムト 『類聚古集』

ユキテヤトハン (西本願寺本)

ユキテイヌルト 『童蒙抄』

ユクテニイント 『万葉考』

ユクユクイムト 『略解』

ユキテヤイルト 『代匠記』

サシテヤイルト 『古義』

ナニヲイムトカ (井上『新考』)

ユキテヲイムト 『新訓』

ユキテイナムト 『新校』

古訓及び新訓がそれぞれに異訓を示し、『古義』『新考』などは誤字として扱う。これは現在の訓に到っても、古訓に従うものは殆どなく、独自の訓を提出しているのである。したがって、字面の上から論ずることは不可能であろうから、(ハ)の歌の全体の検討から考察する必要がある。

下句の「白檀挽而隱在」の「挽而」へヒキテは「白檀」をへ引くの意に理解することができ、「白檀」は「挽而」にかかると。「白檀」をへ引くとは、(ハ)を引いた如き「月」の状態を指すものであることは、

天の原振りさけ見れば白檀張而懸有夜道は良けむ(3—289)

とある。「白檀」↓(ハ)張と全く同じ表現手法であろう。しかも、この歌には「初月歌」の題詞がある。したがって、「白檀挽而」までが、弓を引いたような「月」の状態を云うのであり、この弓を引いた如き月(月船)に、「月人をとこ」(月船の渡り守)が「隱在」と云う意になるであろう。実際に、月を見てもその月の内に「月人をとこ」などは見えないから、そこに「月人をとこ」の渡り守が「隱在」ことを想像し詠んでいるのである。この「隱在」は、先の「懸有」と同じ手法であって、「隱」は「不見也」(『玉篇』)と云うように、外からは隠れて見えない状態を指すのである。

訓は「カクレル」とも訓まれているが、「コモレル」の訓が正しいであろう。

この歌は、「射」「隠」「弓」「挽」の関係から、従来、弓を射ることに関連した解釈がなされて来た。『注釈』は、天の原を行きながら射ようと、白真弓をひいて山の木蔭にこもっている月の男よ。

とし、七夕の歌ではない、とするのであった。或は、『私注』は七夕の伝説に関連させながらも、

天の原を、織女の許へ通ふ牽牛を、射ようとして、白真弓を引いて、隠れて居る。月人男が。

と云う解釈に基づいて、「七夕の夜、牽牛が織女に通ふのを、月が妬んで、山かげに隠れて居て、要撃しよう」と弓を張って隠れて待つて居る」と云う趣向であると説明している。だが、これは「弓」の縁語として「射」や「挽」が詠まれているのであって、実際には弓を射ることと直接関連した歌ではないと思われる。

さきに、下句が「月の船」に乗り隠った渡り守の「月人をとこ」を詠んだものであることを述べた。下句をそのように理解すると、上句は、「月人をとこ」の動作を指示することになるだろう。二句目の「往射跡」の「跡」は、「月人をとこ」の動作を示す助詞であるから、いま、月人をとこが船に乗って何かをしようとしていることを云うのだろう。「往射」はそのことを指すのだが、「射」を仮に除いて考えると、〈天の原〉↓〈往〉となる。すなわち、「往」は〈去く〉意であるから、天の原へ出発しようとするのである。とすれば、「射」も「往」の意の範疇に内包されるものである。この「射」が「往」の意を明確に示すものはないが、次の歌に、

妹許りと馬に鞍置きて射駒山うち越え来れば紅葉散りつつ(10—12—10—1)

とある「馬に鞍置きて」は「妹の許へと志し、馬に鞍を置き、それに乗ってイクのイクを、イコに通じさせた序」(『私注』)であると説明するように、「射」は「去」(往)に屈折した認識がある。この「イ」の連接によって「去」の意を表わすものに「明日よりは印南(将行)の川の出去者(イデテイナバ)」(12—13—198)がある。「射」は「去」或は「往」「行」の意味を表わすものであることは明白である。とすれば、二句目の「往射跡」は「往去跡」と考えるのが妥当であろう。訓は『新校』の「ユキテイナムト」がもっとも正確であると云える。上句の意は、「月人をとこ」が天の原へ出発しようとすることを述べているのである。従って、(1)の全体の歌意は、

天の原へいよいよ出発しようと、妻迎えの月の船に乗り隠っている、渡り守の月人をとこよ。

## 8 詞人の言語——結語

となる。もちろん、この場合も牽牛を乗せて天原を渡る船を「月」に譬えたものである。ただ、この「天の原」は、他の七夕歌の「天海」とは異なる。おそらく神話的な「天原」が意識されていたからであろう。

万葉の歌語「月船」の成立の背後に、かかる七夕歌の「月」の構想があったと見られる。牽牛の乗る「船」を「月」に構想したのは、幻想的な七夕歌の世界に於いてであった。

天上を渡る月を「月船」とし、その月船に船の渡り守である「月人をとこ」を構想するのは、明らかに詞人の強烈な創造力が見られるだろう。殊に(イ)の歌は、天象に関する歌の極めて乏しい『万葉集』に於いては異例の作品である。詞人の創造した言語の世界がそこにはある。神話的発想の「天原」を一方にもち、更に、天上を「天海」として構想する、謂わば反神話的な発想の中に「月船」などの歌語を生む構想力があつたと云えるであろう。むしろ、(イ)も(ロ)も、(ハ)がもともと七夕歌であつたものが、「詠月」の歌に認定され収録されたと同じように、いずれも七夕歌にかわるものではなかつたかと考えられるのである。<sup>(12)</sup>「月人をとこ」を詠んだ歌は、七夕歌に見られるものだが、(イ)の「詠月」の歌に「月人をとこ」の語が詠まれることによって、「月船」と「月人をとこ」との関連が考られた訳である。これは、そうした歌を構想する同一の構想力が、同一の圈内になければ容易に発想することは困難であろう。

これら、(イ)から(ト)までの七首の内、作者の判明する歌は、人麻呂の七夕歌とする(ト)のみである。他は全て未詳歌であるが、この未詳歌の中で、(イ)は左注に人麻呂歌集の所出とするし、更に(ニ)も人麻呂集の所出である。また、(三)(ハ)の七夕歌は『夫木抄』に収録されて作者を人麻呂としている。(ニ)は『夫木抄』(十九)「星」、(ハ)は「風」に収める。ただ、(ホ)は『万葉集』では作者不明歌であるから、直ちに人麻呂の作と認定することはできない。更に、(イ)の「詠月」の歌は、(ト)の人麻呂の七夕歌と類想の歌であるので、人麻呂に近よりを見せる。とすれば、全く人麻呂圏に近よりを見せないのは(ロ)と(ハ)の二首である。

このように、七首の歌の中で、明瞭に人麻呂圏を示す歌が人麻呂作を含めて「詠天」「七夕」を合せ三首に見られ、また、(イ)の人麻呂との類想、(ハ)の人麻呂への仮託をも含めれば、その傾向は更に増える。これは、かかる歌の構想力

が人麻呂圈を基盤とした歌の場に存在したことを示すものであろう。

- 注1 杉本行夫氏は「月を舟にみたていふ」（『懐風藻』）とする。  
2 釈清潭氏は「舟中に月在ればなり」（『懐風藻新釈』）と云う。  
3 「詩と歌の接するところ」『古今集以前』  
4 『上代日本文学与中国文学』（中）  
5 『懐風藻註釈』  
6 「故林古溪氏著『懐風藻註釈』、『国語と国文学』36巻5号  
7 『月舟』小論『万葉集の比較文学的研究』  
8 古典文学大系『懐風藻』頭注  
9 『古今集以前』注3参照  
10 橋川時雄氏「七夕物語とその詩歌」『万葉集大成』（民俗篇）月報収録  
11 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学』（下）  
12 (イ)を七夕歌とする考えは、渡瀬昌忠氏にもある（巻七人麻呂歌集の短歌）『万葉集を学ぶ』第五集近刊）。
- この小論は、昭和五十二年度上代文学会大会に口頭報告したものに加筆したものである。